

学校名：豊後高田市立真玉中学校

校長名：松 峯 典 孝

所在地：大分県豊後高田市中真玉 1 1 7

電話番号：0978-53-4014

I 実践校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

豊後高田市真玉は、大分県北部の六郷満山の仏教遺跡の宝庫ともいわれる国崎半島の付け根の豊後高田市北部よりに位置している。とくに真玉川上流域の無動寺、應暦寺は六郷満山の一つとして、また椿堂は弘法大使所縁の札所として有名で、観光に訪れる人も多い。さらに「環状列石」でよく知られている猪群山や温泉施設、農業体験施設があり、絶好の景勝に恵まれて夕日百選にも選ばれた真玉海岸や、国体カヌー競技場となった海洋センター等もある。

真玉中学校は、平成9年に臼野中学校と旧真玉中学校が統合され新真玉中学校としてスタートして今年で14年目なる。全校生徒87名、PTA会員数76名の小規模校であり、生徒は素朴で何事にも真剣に取り組む姿が見られる。

地域内の臼野、真玉両小学校からの卒業生を受け入れる旧町内唯一の中学校として、地域の方々から熱い関心や期待が寄せられている。文化祭や体育大会等の行事では、保護者やゲストティーチャーを学校に招いたりして地域の方々との交流を長年にわたって行い、地域と共にある学校として育ってきたといえる。

2 学校の概要 (平成22年5月1日現在)

	1年	2年	3年	特別支援学級	計	
学級数	1	1	1	1	4	
生徒数	男	18	19	8	2	47
	女	14	12	13	1	39
	計	32	31	21	3	87

教員数 13名 (保健体育科 1名)

武道・ダンス授業の状況

領域：武道 領域の内容：剣道

	1年	2年	3年	特別支援学級	計	
配当時間数	13	10	0	10	23	
担当教員数	1	1	-	1	3	
外部指導者	2	2	-	0	4	
生徒数	男	18	19	-	0	37
	女	14	12	-	1	27
	計	32	31	-	1	64

教員数 13名 (保健体育科 1名)

領域：ダンス 領域の内容：現代的なリズムのダンス

	1年	2年	3年	特別支援学級	計	
配当時間数	10	10	0	10	20	
担当教員数	1	1	-	1	3	
生徒数	男	18	19	-	0	37
	女	14	12	-	1	27
	計	32	31	-	1	64

II 授業事例及び今後の展望等

【本事業の成果の要点】

本事業を実践するに当たり、市教育委員会の招へいする指導者会議が地域の剣道連盟にはたらきかけ、各学校に派遣する指導者を決定した。保健体育科教諭は、指導者とともに計画の立案、指導内容・指導法を検討し、学校や生徒の実態に即した授業を展開した。

その結果、生徒は、剣道の学習に興味・関心をもち、剣道の基本技能を身に付けるとともに、伝統的な礼法・作法も学ぶことができた。また、実技講習会や研修会をとおして、保健体育科教諭の技能・指導力の向上が図られ、地域指導者と複数で授業に臨むことにより、安全に対する配慮も行き届いたきめの細かい授業が展開された。

1 研究テーマ等

(1) 研究テーマ

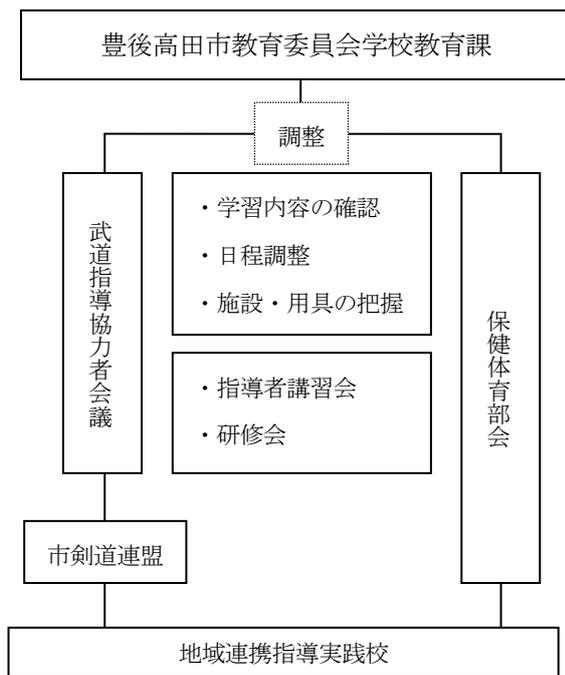
生徒が意欲的に取り組む剣道授業の在り方

(2) 研究テーマ設定のねらい

武道は、とくに専門性を要する領域である。平成24年の武道必修化に向けて、生徒が安全かつ意欲をもって学習に取り組むためには、施設・用具の工夫はもちろん、指導方法・技術の向上が不可欠である。

そこで、生徒が剣道の本質に触れ、基本的な技能を身に付けながら、意欲的に取り組むことができる授業を展開するために、地域の剣道指導者と連携した指導及び保健体育科教諭の指導力向上を図るべく、本テーマを設定した。

(3) 取組体制



(4) 本事業における主な取組

平成 22 年 度	5月	保健体育部会
	5月	県実技指導者講習会
	8月	指導者講習会受講
	10月	単元計画の作成
	11月	公開研究授業・学体研参加
	1月	保健体育部会
	2月	公開研究授業・指導者講習
	3月	保健体育部会

2 授業事例

(1) 剣道

① 目的

楽しみながら剣道の基本技能を修得するとともに、伝統的な礼法や作法を身に付け、相手を尊重する態度を養う。

② 具体的な指導方法

ア 武道指導協力者と連携した指導

保健体育科教諭と武道指導協力者が、連携して授業を行うことにより、安全に対する配慮をより確実にし、生徒が効率的に着装ができるようにした。また、示範や生徒の受けの相手をするなどして、効果的な技能の指導ができるようにするとともに、適切かつ客観的な評価がされるよう、評価の観点の共通理解を図った。



写真1 教諭と武道指導協力者による示範

イ 着装

剣道着・防具の着装については、指導者の支援と生徒相互で確認や教え合いが必要となるが、段階的に自分自身で行えるように移行した。そこで、評価においては、グループ単位の評価から個人評価へ発展させた。



写真2 協力して着装

ウ 基本的な礼法・作法

礼や竹刀の置き方・持ち方を指導するにあたり、それぞれの所作に意味があることを説明し、生徒が納得した上で修得できる指導を心がけた。また、礼法・作法だけを評価させる試合形式の指導方法を取り入れ、相互評価させることにより、学習の意欲を高める工夫を行った。

エ 基本的な技能

基本打突においては、木刀・竹刀それぞれの特性を生かし空間打突を行わせることで、定着を図った。

掛かり稽古においては、保健体育科教諭と武道指導協力者が示範を行うことで、イメージをつかませるとともに、生徒の相手をしながら直接指導を行う機会も多く設けるようにした。



写真3 立ち会いの作法を練習

オ 修得した技能の活用

剣道の特性に迫ることができるよう、技能の修得段階における試合を取り入れることとした。試合では、生徒同士で審判を行えるよう、技能のポイントを簡潔に表すようにした。

カ 指導と評価の一体化を図る

授業のはじめに本時の目標を示し、目標を達成するための手立てを工夫させるようにした。生徒の自己評価については、観点を明確に示した簡潔なものとし、短時間で行えるよう工夫した。技能の発達段階に合わせた試合を行わせ、グループ内外で審判をさせたり、団体戦で勝敗を

競わせたりすることにより、グループ内での協力を促し、言語活動の充実を図った。



写真4 自己評価シートに記入

③ 成果・課題

ア 成果

剣道着・袴・防具を装着しての剣道授業は、生徒にとって新鮮で、興味深く学習に臨むことが出来た。授業の初期段階では、着装に教員の支援が不可欠であるが、授業が進むにつれて生徒同士の教え合いが見られるようになり、授業開始前に着装を終えることができるようになった。2年生は、昨年度13時間の授業を経験しており、準備も早く、授業時間を効率よく技能の修得にあてることができた。



写真5 授業開始前に本時の目標を確認

立ち会いの作法を競う試合を行わせることにより、礼法や作法を学ぶことにも意欲的に取り組ませることができた。礼法や姿勢は、日常生活に反映され、教職員のみならず、保護者や地域にも好印象をもって受け入れられた。また、打突部位

を制限した試合等，習熟段階に応じた試合を取り入れたことにより，相手の動きに応じて技を繰り出すなど，剣道の特性に触れさせることにつながった。



写真6 研究討議

武道は施設や用具の充実と指導に専門性を要するため，保健体育科教諭も指導に自信がない状況だった。また，指導者講習会に参加し，武道指導協力者と連携した授業を行うことで，指導力の向上と専門性の充填がなされ，より安全に，楽しく取り組ませることができたと考える。

イ 課題

本格的に剣道着・防具を着装しての授業は，生徒の準備が整うまでに時間を要する。生徒相互の支援ができるようになるまでには，2時間続きの計画が望ましい。また，剣道着については学校の備品であるため，衛生面での危惧が予想される。そこで，学年ごとに剣道を取り扱う時期をずらすなどの配慮が必要となる。剣道着にはクリーニングを施し，面や小手には除菌消臭剤を散布するなど，管理を徹底することが，よりよい授業につながると考えられる。

技能の修得過程においては，掛かり稽古が重要であるが，上達するためには，元立の果たす役割が大きい。しかし，生徒たちの中には，恐怖心から目を閉じたり，体をそむけたりする者も多く，かえって危険な結果を招く。また，生徒同士の関係を重んじるあまり，思い切って打

ち込むことができないでいる生徒も見られた。

また，生徒に学習意欲をもたせるために，様々な形態の試合を取り入れたが，礼法や作法に関する試合は，判定の観点をまとめて生徒同士の審判を可能にした。しかし，一本を競う試合になると，専門的な審判技能の必要性を感じた。

3 今後の展望

本事業による成果として，第1に挙げられるのは，外部指導者と連携した指導による学習効果が得られたこと。第2に教員にとっても日本古来の剣道文化の本質に触れる機会をもつことができたことである。

次に，学習の成果として挙げられるのは，生徒が剣道の本質に触れ，興味・関心をもつことができたという点である。

武道必修化の背景として「伝統と文化の尊重」が挙げられるが，剣道への関心・興味が高まったことで，今後，伝統文化を尊重する態度が生徒に身に付いていくことが期待される。